

ハイデガー『ソピステース』講義におけるプラトン解釈と存在への問い

上田圭委子（首都大学東京）

「・・・というのは、君たちが、《存在する》という言葉を使うとき、いった君たちは何を意味するつもりなのか・・・私たちは、以前にはそれをわかっていると信じていたのに、いまでは困惑に陥っているのだ。」(Plato, *Sophistes*, 244a.)

ハイデガーの主著『存在と時間』(1927)は、プラトンの後期対話篇のひとつである『ソピステース』篇の引用でもって開始されている。『ソピステース』篇においては、中期の『ポリテイア(国家)』篇において登場した「善」のアイデアは扱われない。『ソピステース』篇では、「ソフィスト」とは何であるのかを定義することを目指して対話が進んでゆくのだが、そのなかで、もしソフィストの技術を「見かけだけを作る技術」と呼ぶならば、そのときひとは、「見かけ」すなわち在るように見えて実際にはあらぬもの(非存在)が何らかの仕方ですべて「ある」と前提としていることになることが指摘され、非存在とはなにか、という問いが生じる。そこから、更に進んで、上記引用のごとく、《あるもの(存在)》とはそもそも何であるのかをめぐる問いが、問題化される。すなわち、真の实在とは、思惟によって捉えられる非物体的なある種の《形相》であり、他方で物体は实在ではなく動きつつある生成の過程にすぎず、真にあるものといえないのか、それとも、静止しているものも、運動する生成の過程にあるものも、ともに「あるもの(存在)」と見なすことができるのか、といった問いが問題となるのである。これに端を発して存在と非存在、動と静、同と異、真と偽、といった概念の関係と、それに関わる魂における思考、判断、言表とは何であるのかが、対話(弁証術)を通して探究されるのがこの対話篇なのであった。ハイデガーは、1924・25年冬学期講義の後半部分で、アリストテレス解釈から遡る形で、このプラトン『ソピステース』篇の現象学的解釈を遂行していた。したがって主著の冒頭での『ソピステース』の引用は、自らの開陳する「存在の意味への問い」が、何らかの意味において、こうしたプラトニックな問いの流れを汲むものであることを、示そうとしたものと考えられる。

本発表では、ハイデガーの『ソピステース』解釈(ハイデガー全集第19巻所収、以下GA19と略記)を主たるテキストとして扱い、『存在と時間』成立前のプラトンの現象学的解釈において「存在への問い」がどのように扱われていたのかを明らかにする。同時に、1926年夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』をも参照しつつ、ハイデガーがこの時期、プラトンの諸著作のなかで『ソピステース』篇をどのように位置づけていたのかについても、確認する。そしてそれらを通して、最終的には、『存在と時間』において成立を見たと考えられる存在の真理の基本構造が、ハイデガーのこの時期のプラトン解釈のなかでは、現前性としての存在(ウーシア)と、存在が露わになるという意味でのアレーテイア(非秘匿性)としての真理、存在が現においてロゴスを通じて露わになるところの現存在(プシュケー)といった三つのもののあいだの関係において、見て取られていたことを、特に存在における運動(キネーシス)概念に注目しつつ明らかにしたい。

ハイデガーの『ソピステース』解釈は大きくは二部に分かれている。序論のあとの第一部第一章では、魚釣り師の定義の箇所(219a-221c)が扱われ、第二章では、ソフィストの定義の1-5まで(221c-226a)が扱われ、第三章では、ロゴスおよび弁証術に対するプラトンの立場がどのようなものかを明らかにするために『パイドロス』後半部の議論が扱われ、第四章で再びソフィストの定義の6-7(226a-236c)が扱われる。続いて第二部では、存在と非存在との存在論的解明(236e-264b)の箇所が扱われる。まず序論のあと、第一章で非存在という概念の持つ困難が考察される箇所(237a-242b)が扱われ、第二章で存在という概念の持つ困難が考察される箇所(242b-250e)が扱われるが、この章は、更に三つに分かれている。第一に存在についての古い教説についての議論の箇所(242c-245c)が扱われ、第二に存在についてのプラトンと同時代の教説についての議論の箇所すなわち『存在と時間』でも言及される *γίγαντομαχία περί τῆς οὐσίας* (246a-250e)の箇所が扱われる。そして第三には、存在(ὄν)についてのテーゼをまとめる議論の箇所(249b-251a)が扱われる。最後の第三章では、諸々の類のうちの共通性による問題の積極的な解決の箇所(251a-264c)が扱われて、講義は終わる。

私たちは、このうち特に第二部第二章以下の「存在への問い」に注目してその内容を明らかにすると共に、その問いの遂行の方法としての弁証術とロゴスに関わる、『パイドロス』への言及の箇所にも注意を払う。

『パイドロス』への言及の箇所では、ハイデガーはロゴスを *Rede* (語り) と訳し、この箇所におけるソクラテス(=プラトン)は、「事象を見えるようにさせる」という「ロゴスの働きに関して、二つの条件が要求されると言っている」(GA19,S.330)として、ソクラテスが総合と分割という手続きに言及する箇所を解釈していた。ハイデガーは、先ず「ロゴスと、ロゴスでもって語るものは《多様にちらばっているものどもを一つの見方、ただ一つの見られたものへと、導き、秩序付ける》(265d3)ことができなくてはならない」と考えられていることを指摘し、これが総合(*συναγωγή*)と呼ばれるものであるとする(GA19,S.330-332)。次に、ハイデガーは、「弁証術の第二の構成要素」としての「分割(*διαίρεσις*)」とは、「《さまざまな種類に分割することが出来るということ》(265e1)、今、一つの見方へとまとめて見られているもの、アイデアへの持続的な観点によって導かれて第一に探し求められたものが、《二つに切断される》」ということであるとし、このような切断によって、事象全体を「媒介しているものが見えるようになる」こと、つまり「諸事象の規定性のそのつどの素性の連関が見えるようになり、それによって有機体を媒介しているものの連関において有機体全体を露わにすること(*Freilegung*)において、同時に目の前に存在しているものの存在の由来の全体が見えるようになる」(GA19,S.332-333)のだと解釈している。

『ソピステース』解釈の中でハイデガーは、「魂(*ψυχή*)」を、「世界と自分自身に対する人間の実存の存在」と言い換えつつ、存在への問いを、存在へと関わる魂の運動として捉えている。存在とかかわり、存在とは何かを露わにしようとする魂の運動が、ハイデガーがプラトンの弁証術のうちに見たものであり、それは自身の存在への問いの模範でもあった。